

# 生徒たちが世界に目を向け、 幅広い視野で未来に臨めるように。

**福岡 孝一**  
KOICHI FUKUOKA

赴任地

 **ベリーズ**

赴任地での職種(活動分野)  
**環境教育**

京都市西京区  
**京都市立檉原中学校 教諭**

教鞭を執って7年目、教師としての経験を活かし、青年海外協力隊としてベリーズに赴任。オレンジウォーク町の8つの学校で環境教育に携わる。帰国後、元々勤務していた学校に復職。英語の授業とクラスの担任を務めながら、自らの体験を生徒たちに伝え続けている。

## 赴任期間中も生徒たちに活動を伝え続けて。

京都市立檉原中学校の一角にある階段前掲示板は福岡孝一先生の特別スペースだ。青年海外協力隊としてベリーズで活動していた福岡先生が、同国の位置を示す地図や街の紹介、近隣の国を旅した写真などを賑やかに展示し、生徒たちに紹介している。

「ベリーズに赴任していた2年間は『ベリーズ広報』という通信を定期的に学校に送り、生徒たちに赴任地の様子や活動の近況を伝えていました」。現地での活動中から帰国した現在まで、生徒たちが広い世界に目を向けられるように、発信を続けてきた。

福岡先生が青年海外協力隊としてベリーズに赴任したのは2013年のこと。生徒たちはもちろん、保護者からの信頼が厚い福岡先生にとって、2年間も職場を空けることはかなり大変な決断だった。

「大学を卒業してからずっと“先生”と呼ばれ続けてきた自分を、まったく異なる環境に置くことで経験値を高めたかった、というのが大きな動機です。また、わたしは英語教師ですが、長期の海外生活の経験がありませんでした。できるだけ早い段階でそれを体験することが教師としてのレベルアップにつながると考えたんです」。

## 子供たちはもちろん、 保護者も見据えた教育を。

ベリーズでは日本の学校で教えていた生徒たちと年齢が近い、11~14歳の生徒たちを対象に、環境教育を行った。学校にも、道路にもゴミが溢れている状況を見て、「ただ生徒たちに『ゴミのポイ捨てはいけない』と教えるだけでは効果は表れないだろうな…」と考えた福岡先生は、子供たちに授業の内容を記したプリントを配布することを発案。子供たちがプリントを家に持ち帰り、保護者に授業の内容を話しながらそれを見せることで、保護者の意識も変えていこうというのがその狙いだった。

しばらくして、ある保護者が「うちの子供が家に帰ると、熱心にフクオカ先生の授業についてわたしたちに説明してくれるんです」と教えてくれた。少しずつだが、大きな変化のための第一歩を踏み出せたと感じることができた。



ベリーズや近隣の国を紹介する掲示板。



生徒たちを引き込む授業で定評のある福岡先生。

## 地球の裏側でも 子供たちの心は複雑。

「ベリーズの子供たちも日本の中学生たちと同じく、さまざまな理由から複雑な悩みを抱えています。10代最初の、人生で一番多感な時期ですからね」。協力隊からの帰国後はさらに余裕をもって、生徒たちと接するようになった、と語る福岡先生。

授業の合間に、ベリーズで体験したエピソードを生徒たちに語って聞かせる。「一人でも多くの生徒が世界に目を向けて、視野を広めてくれれば」と願いながら。

上司に  
聞く!



京都市立檉原中学校 校長 **土田 浩**さん

わたしたち教育者の役割は、自らの「良質な体験」を生徒たちに伝えていくことだと思います。福岡先生は近隣の中学校にも招かれ、ベリーズでの体験について講演を行いました。中学生にとって、学校生活は大切な人生経験。福岡先生は生徒たちに、よい刺激をもたらしていると思います。

## 教師としてわかりやすく教え、 隊員として自主的に行動する。

「環境教育の授業では黒板にカラーコピーを貼るなど、視覚教材を積極的に用いました」。ベリーズの授業では黒板への板書が主流だったため、現地の教師たちもこの授業法に関心を持っていたという。

「また、英語のスペリングが正確にできない生徒が多かったので、クロスワードを用いたゲーム形式の授業も行いましたね」。これは日本の授業でも利用していた手法だ。

さらに、バス車内からのゴミのポイ捨て禁止キャンペーンにも尽力。賛同する現地企業からスポンサーを募り、自らデザインしたポイ捨て禁止ステッカーを町中のバスに貼り回った。

「“いいアイデアだ。ぜひ俺のバスにも貼ってくれよ”と運転手さんから声を掛けていただいたことが印象に残っています」と福岡先生は語る。



現地の教え子たちと記念撮影。折り紙を教えたところ大好評だった。



現地の生徒たちの感情表現はとても豊かだ。

## 青年海外協力隊を目指すみなさんへ 予想外の出来事に対する 「対応力」が身につきます。

協力隊員として過ごす2年間を価値あるものにするかどうかは自分次第。わたしはベリーズでの活動で、以前よりも「事前準備」の大切さを認識するようになりました。活動開始当初は何事も上手くいかないもの。いろんな事態を想定して準備することで、対応力を身につけることができたと思います。

# 市民に寄り添い、地域課題を解決するアドバイザーとして奔走。



亀村佳都  
KAZU KAMEMURA

赴任地

 ニカラグア

赴任地での職種(活動分野)  
環境教育

京都市中京区  
京都市 文化市民局 地域自治推進室  
まちづくりアドバイザー

京都大学大学院に在学中、ユネスコ北京事務所  
でインターンを経験。途上国への関心から  
青年海外協力隊の環境教育隊員として  
ニカラグアに赴任する。帰国後、京都市 文化市民局  
地域自治推進室にまちづくりアドバイザーとして  
採用され、現在も伏見区を舞台に活躍中。

## 人々との信頼関係づくりにじっくり時間をかける。

京都市では、11区・3支所をそれぞれ担当する14名の「まちづくりアドバイザー」が活躍している。亀村佳都さんは伏見区の人々との信頼関係づくりに、市民のまちづくり活動支援やイベント、交流会などの取り組みを企画・運営するアドバイザーの1人だ。

青年海外協力隊員としてニカラグアで2年間、環境教育活動を行ってきた亀村さん。「現地では人々とじっくり時間をかけて信頼関係を築いていきました。京都でもさまざまな人々の意見に触れますが、常に“そういう考え方もあるよね”と受け止められるのは、現地での経験が活

きているのだと思います」。

活動の範囲は地産地消PRのため、区役所で野菜や特産物を販売する「区民にぎわいエコ朝市」や料理教室の開催、住民の交流や意見交換の場となるまちづくりカフェの運営など、実に幅広い。

「仕事や家庭で忙しくて、他のことに時間を割けない人々もたくさんいると思います。でも、まちづくり活動への参加は地域や社会を知るきっかけになったり、知り合いが増えたり、自分の暮らすまちに愛着を感じたり…日々の生活が充実すると感じています」。

## たくさんの人の心を動かし、活動の輪を広げる。

できるだけたくさんの人を、活動の輪に取り込んでいく。青年海外協力隊での環境教育活動でも、亀村さんの手腕は存分に発揮された。「子供たちとのゴミのポイ捨て防止キャンペーンでは、現地の各省庁からメディア、店主さんたちと、本当にいろんな人たちに協力をお願いしました。キャンペーン中の警備や車両の使用では、なんと軍隊にまで協力いただいて…」また、赴任期間中に愛知県で開催された「子ども環境サミット2005」に、ニカラグアの児童1人を出席させることも成功。「渡航費と宿泊費以外は自己負担だったので、日本からの寄附を募って、日本での交通費や食費などの滞在費にあてました」。愛知で立派に発表を行い、日本の小学生たちと楽しく交流した児童は、「しっかり働いて、将来はまた日本の友達に会いに行きたい」と言ってくれた。



いつも明るくほらかな亀村さんは職場のムードメーカー。



日々、担当地区の伏見と市役所を忙しく往復する。

## 地域にはまだまだ解決すべき課題がある。

「まちづくりアドバイザーとして思うのは、ニカラグアがさまざまな課題を抱えているのと同じように、京都のまちにも解決すべき多くの課題があるということです」。

観光地、そして京都議定書のまちとして知られる京都だが、福祉、環境、子育て、まちのにぎわいなど、市民が生活する上で感じる課題は多岐に渡る。「だから、まだまだわたしや地域の人々には、やるべきこと、できることがたくさんあるんです」。

上司に聞く!



京都市 文化市民局 地域自治推進室 地域づくり推進課長 松村 憲司さん

亀村さんは実に積極的でバイタリティのある人。その反面、仕事を慎重に進める側面もあり、とても信頼できる人材です。もともと慎重な人だった亀村さんからアグレッシブな行動力を引き出したのは、ニカラグアにおける青年海外協力隊としての活動があったからだといわれています。

## 困難な状況を前にしても自分で解決策を見つけ出すこと。

亀村さんは着任後すぐ、現地の教師たちとともに環境教育のカリキュラムづくりや研修会を行う予定だった。

「着任してすぐに3か月間の教員のストライキが発生。それが終わると「授業の遅れを取り戻さないといけないから」という理由で研修は延期に。実際、途方に暮れました(笑)」。

しかし、亀村さんは決定権を持つ人々に授業計画の重要性を訴え、無事に研修会の開催にこぎつけた。

「『子ども環境サミット2005』へ児童を招くために、パスポートの発行を申請するときも、パスポート専用の紙が在庫切れで発行できない事態を防ぐために、走り

回りました」。

どんな事態にあっても解決策はあると信じ、自分でそれを見つける。現在もその意志で、伏見のまちづくりに挑み続けている。



ゴミのポイ捨て防止キャンペーンで子供たちと。



現地の小学生たちに折り紙などを通じて、日本の文化を伝えた。

## 青年海外協力隊を目指すみなさんへ

世界中どこにいても、「生活」のペースは同じ。

赴任中の2年間は異文化のなかで暮らすこととなりますが、朝起きて、食べて、仕事して、眠るという生活のペースは世界のどこに行っても基本的に同じ。現地の人々と生活をともにして、たくさんおしゃべりする中で、「人のために何ができるか」を問い続けることが大切です。きっとその経験は一生の宝になると思います。

# 女性が輝く京都の地域支援のため 中小企業診断士としてできることを。



**阪本純子**  
JUNKO SAKAMOTO

赴任地

 **ケニア**

赴任地での職種(活動分野)  
**村落開発普及員**

京都市北区  
**中小企業診断士事務所  
京都府中小企業診断協会**

通販会社でアパレルページの企画を担当していたが、夫が青年海外協力隊として海外で活躍していたことに刺激を受け、自らも村落開発普及員としてケニアへ。帰国後、京都府中小企業診断協会に入会、京都のソーシャルビジネス支援事業などに取り組んでいる。

## 生きることに「貪欲」だったケニア女性たち。

阪本純子さんは中小企業診断士として、主に京都の公的支援機関の活動を支えている。さらに、京都府のソーシャルビジネスの支援事業を手掛けるようになって3年。京都府の各地域に暮らす女性たちが抱える雇用や子育てなど、さまざまな課題をビジネスの手法を用いて解決していくのが目的だ。

「青年海外協力隊の活動から帰国して間もなく、自分自身が妊娠・出産を経験したこともあり、誰もが生き生きと暮らしていくことのできる社会づくりに貢献したいと思うようになりました」。

個人事業主や企業などが利益を生みながら、地域の女性たち、そしてすべての人々の充実した暮らしを支援できる持続的なモデルを作り出すこと。そこに中小企業診断士としての阪本さんの手腕が発揮される。

「赴任先のケニアでは、女性たちは『働く』こと、そして『学ぶ』ことにとっても貪欲でした。そんな彼女たちの姿勢が、家事労働から抜け出して地域コミュニティに参加することの原動力になっていたように思います。京都での支援活動でも、地域の女性たちからは同じような外向きのエネルギーを感じることができます」。

## 自分の仕事に誇りを持つ 現地の女性たちを前に。

村落開発普及員として赴任したケニア・マチャコス県では社会開発事務所現地女性たちとともに働いた。「彼女たちは自分の仕事にやりがいを感じ、とても大きな誇りを持っています。しかし、日本のビジネス社会で働いてきたわたしの目から見ると、効率化の面で大きく改善すべきことがあったことも事実です」。

例えば、現地の職員たちは素晴らしいタイピングのスキルを持っているのに、ワープロソフトを単に文書作成の道具としてしか使用しておらず、データの管理がなされていない、エクセルの使い方を誰も知らなかったりする。「つい、上から目線で注意をしてしまい、ケンカになってしまったことも…」。

そこで阪本さんは自分の態度を改め、女性たちへの接し方を変えていった。



中小企業診断士として派遣された支援先からの再指名率も高い。



人々の目線、ベースに合わせて地域に貢献することが信条。

## 相手の目線に立って しなやかに寄り添うこと。

「相手の目線に合わせて考えることの大切さを、この経験から学びました。それからは彼女たちの話をよく聞き、ときには一緒に仕事をサボり、地元のペースに自分を合わせていったんです」。そこからは、人間関係がスムーズになった。

いつも、相手の目線に立ってともに考え、できることをやる。ケニアで培われたこのしなやかな姿勢が、現在の仕事にも大いに活かされているという。

先輩に  
聞く!



京都府中小企業診断協会 代表理事 **山脇 康彦さん**

わたしにもJICAの専門家として中央アジア諸国で働いた経験があり、阪本さんには親しみを持っています。経営支援の高い専門性と、女性ならではの視点を持つ阪本さんは、実に頼もしい存在。あとに続く女性診断士たちの指標として、これからも活躍してほしいと思います。

## 日本のやりかた、流儀を伝える 「代表者」であることの自覚が大切。

ケニアでは社会開発事務所の事務効率化に努めた阪本さん。

「それまで手書きで管理していたデータをエクセルで管理することや、管理したデータを検索する方法を一から説明しました」。



ヤギ飼育グループのモニタリングにて記念撮影。

日本のビジネス社会では常識となっていることだが、職員たちにそうしたスキルが備わっていない。むしろそれがあたりまえに習慣化されている日本社会の代表として、阪本さんはますますやる気を高めていった。

「協力隊員の役目のひとつは、自分の活動から日本のやりかた・流儀をよく知ってもらいたいと思います」。日本人の生産性の高さの裏付けとなっている整理整頓の意識やサービスの在り方、礼儀などを伝えたことは、現地の職員たちにも刺激を与えたのではないかと阪本さんは振り返る。



地元産バッグの販路開拓、品質改善に尽力した。

**青年海外協力隊を目指すみなさんへ**  
柔軟な適応力を心がけ、  
何事も明るく、  
プラス思考を心がけて。

特殊な専門性を持っていないでも、日本で社会人として培った経験は必ず現地でも役立ちます。自分が「日本人の仕事」を紹介する、そんな気持ちが必要です。また、何事にも柔軟に対応できる適応力を持つことで、現地の人々との距離は近くなります。明るく、プラス思考で活動に取り組んでください。

# 高齢者のみなさんがいつまでも 元気に暮らせる亀岡を目指して。



吉田 司  
TSUKASA YOSHIDA

赴任地  
ブータン

赴任地での職種(活動分野)  
体育

京都府亀岡市  
亀岡市 健康福祉部  
高齢福祉課

視覚障がい者の生活支援・職業訓練施設で  
体育指導に携わっていた経験を活かし、ブータンの  
視覚障がい児のための学校で体育教師として  
活躍。帰国後、京都府立医科大学に  
勤務したのち、亀岡市に採用。  
地域の介護予防に取り組んでいる。

## 高齢化社会が抱える課題の根本に迫る。

高齢化が進むなか、要介護者の増加は国全体が抱える大きな課題となっている。この状況を受け、亀岡市が大学などの研究機関、京都府、栄養士会、歯科衛生士会とともに総合型介護予防プログラムの開発を進めている。吉田司さんは亀岡市 健康福祉部の高齢福祉課で、健康運動指導士として活躍している。

「総合型介護予防プログラム」では長期的な視点に立ち、高齢者の方々が将来的に介護保険サービスを使わずに健康に暮らせるよう、認知症予防や筋力の維持・改善のためのトレーニングを中心とした教

室を開催しています」。さらに吉田さんの役割は、ずっと先を見据えたところにあった。「トレーニングや健康指導を受けられた方一人ひとりが、その後の生活で介護保険サービスを受けずに暮らせるよう健康を維持できているか?健康運動指導が実際に成果を見せているか?…そうしたデータの集積・分析を行うことで、結果をプログラムに反映させ、取り組みをますます充実したものにしていくことが今のわたしの役割です」。

亀岡市内はもちろん、日本全体が抱える高齢化社会の根本的な課題解決に向け、吉田さんは地道な努力を続けている。

## その熱意と行動力は国王の心にも響いた。

青年海外協力隊では、ブータンで唯一の視覚障がい児のための学校に、体育教師として赴任した。一般的な体育指導のほか、障がい者スポーツも定着させたいという意図のもと、サウンドテーブルテニスやフロアバレーボール、ゴールボールなどの指導も行う。「サウンドテーブルテニスというのは、視覚障がい者向けに考えられた卓球で、専用の用具が必要です。ブータンでは、元々あった卓球台に手を加えて生徒がサウンドテーブルテニスを楽しめるよう工夫しました」。

赴任中、予定されていた体育館建設が行われないというトラブルにも見舞われたが、学校の礼拝堂を練習場にするなど、試行錯誤を繰り返した吉田さん。また他の教員とともに生徒を引率したバンコクスタディツアーでは、生徒の熱中症対策などに奔走し、熱意と行動力で生徒を支えた。その活動はブータン国王の耳にも入り、スタディツアー後に接見、「わたしの子供たち(生徒)を助けてくれてありがとう」と、感謝のお言葉をいただいた。



膨大なデータを分析・解析して未来に活かすのが吉田さんの役割。



笑顔を絶やさない吉田さん。  
しかし、自分の使命を語るときは表情が引きしまる。

## 達成感が得られなかったこと。 その反省を今に活かす。

「ただ、赴任期間中に何かを成し遂げた、という達成感を十分に得られなかったことも事実です」と、吉田さんは振り返る。「いま、取り組んでいるのは、これから高齢化が予測される諸外国にとってもモデルとなる事業。亀岡市役所には膨大なデータがありますが、これらを組み合わせて人々の健康のために役立てていくことが目下の目標です」。その思いで、一歩ずつ“達成”への道を歩み続けている。

上司に  
聞く!



亀岡市 健康福祉部 高齢福祉課 課長 小栗 真人さん

わたしたちの事業はさまざまな部署や職種の人々との連携が重要ですが、誰とでもすぐに打ち解けられるコミュニケーション能力と行動力が、吉田さんの強み。今後も青年海外協力隊で培った豊富な経験を活かし、質の高い介護予防事業の実現に向けて取り組んでくれることを期待しています。

## 生徒たちと同じ言葉で話し、近づく。 そして人々の温かい心に触れる。

吉田さんの赴任先は東ブータンのタシガン県にあるカリンという小さな町。

「ブータンの公用語は“ゾンカ”という言語なのですが、東ブータンでは“シャショップ”という言語が用いられています。生徒たちとコミュニケーションを行うためにこの言語を赴任中に独学で学び、マスターしました」。体育館がなく、道具もなく、一緒に活動していた現地職員は途中で産休に入ってしまった。孤立奮闘を強いられた吉田さんだったが、支えになったのは現地の人々の温かな心遣いだった。「ちょうど赴任期間中に東日本大震災が発生したのですが、多くの人々が心から心配してくれました。そして震災の犠牲者

のために祈りを捧げてくれたんです」。



民族衣装の学校制服を着た現地の教え子たちと一緒に。



現地で日常的に使われる方言で  
生徒たちに語りかけた。

## 青年海外協力隊を目指すみなさんへ 「日本人の良さ」を示す 代表としての誇りを持って。

日本人は一般的に強い宗教観を持たないことから、異文化に溶け込みやすいという利点があります。また、日本人特有の勤勉さ、誠実さ、礼儀正しさといった「日本独特の良さ」を活かすことを、途上国の人々は求めています。「自分は日本人の代表だ」という誇りを持って活動に取り組んでください。